

## 一葉日記における和歌と散文

島内裕子<sup>1)</sup>

## 要旨

樋口一葉は『たけくらべ』や『にぎりえ』などの名作を残した明治の小説家として高いが、十代の半ばから、歌塾「萩の舎」に入門して、和歌や王朝文学や書道など、古典の素養を身につけていった。

一葉が明治二十年から書き始めた日記は、当初は、萩の舎での修学と、同門の女性たちとの交流が、中心テーマだった。その後、小説の執筆を志し、半井桃水に師事するようになると、執筆の苦労や、桃水に対する思慕の念が、日記に書かれるようになり、次第に思索的な深まりが見られてくる。さらに、雑誌『文学界』に小説を寄稿するようになる明治二十六年以後は、『文学界』同人の青年たちとの交流が、一葉の文学世界の視野を広げ、世の中や人生に対する感慨を日記に書くことも、折に触れて多くなる。

したがって、樋口一葉が、明治二十九年に亡くなる二ヶ月前まで書き継いでいった歴大な日記は、一葉文学の生成と展開を垣間見る、貴重な「長編作品」とも見なされる。本稿は、このような視点から、一葉の日記の中で、思索的な側面が色濃く表れている箇所注目してみた。その結果、一葉日記には「散文＋和歌」という、ひとまとまりのスタイルで書かれた箇所が見えられ、そこに一葉の、その時々々の思索のエッセンスが集約されていることがわかった。

本稿では、その表現スタイルを「歌文」と呼称して、主要なものを順に取り上げながら、「歌文スタイル」という一葉独自の表現様式から窺われる、一葉の思索の跡を追ってみた。

## はじめに

樋口一葉（二八七二～九六）は、現代では『たけくらべ』『にぎりえ』『大つごもり』『十三夜』などを著した小説家として、よく知られている。けれども、一葉が没してわずか一ヶ月余りの明治三十年一月に、博文館から刊行された『校訂一葉全集』の冒頭に掲げられた略伝では、「歌（＝和歌）を善くし、文（＝小説・散文）を善くし、兼て書（＝書道）を善くす」とあり、一葉の文学業績の筆頭には、和歌が挙げられている。

実際、一葉の文学的な出発は、明治十九年に、満十四歳で、中島歌子の歌塾で

ある「萩の舎」に入門したことからは始まった。萩の舎は、和歌を中心として、古典や書道も教える私塾だった。翌明治二十年一月から、一葉が付け始めた日記は、亡くなる二ヶ月前まで断続的に書き続けられたが、そもそも日記が書かれたきっかけも、萩の舎での歌会や、同門の女性たちとの交流などを記すことだった。また、一葉は、多忙や病気により、通塾できない時期が何度もあったが、亡くなるまで、萩の舎の門人であった。

一般的には小説家と目される一葉であるが、その生涯において、和歌と日記は、両輪となつて、最晩年まで重要な役割を果たしていた。そのような経緯を踏まえて、樋口一葉の日記に散見される「和歌」に注目することによって、一葉が和歌と散文をどのように融合させて、自分の文体を形成していったかを、本稿では明らかにしたい。

年月日が明記されている日記帖以外に、日付なしで書かれた断章もあり、それらからも一葉の内面が窺われるので、本稿では、双方を含めて「一葉日記」と総称して、考察の対象としたい。「一葉日記」には、数はそれほど多くないが、和歌が書き留められている場合がある。その際に、日記の余白などに、まとめて何かの和歌が書かれていることもあるが、本稿で特に注目したいのは、日記のひとまとまりの散文記述の末尾に和歌が添えられている箇所である。「一葉日記」の中から、散文の末尾に和歌を一首添えるという記述スタイルで書かれた箇所を中心に概観し、その内容と表現の特質について考察したい。

文学史の上では、江戸時代の松尾芭蕉や横井也右に見られるような、散文に俳句を添えた「俳文」や、大田南畝の『四方のあか』のように、散文に狂歌を添えた「狂文」など、散文と韻文が融合した文芸スタイルが、すでに存在している。本稿では、これらの作品も視野に収めて、「一葉日記」に散見される、「散文＋和歌」のスタイルで書かれた、ひとまとまりの表現を「歌文」と名付けることにしたい。

近代以前の古典文学における「俳文」や「狂文」などにも適宜言及して、比較検討しながら考察することは、散文と和歌が融合した、一葉の「歌文」スタイルの独自性を明らかにし、文学史的に位置づけることにつながる。

本稿では、以下のような観点から、一葉の「歌文」の内容を分類し、それぞれの特徴を明らかにしたい。すなわち、一葉の「歌文」には、大きく三つのテーマがあると考えられる。

第一に、萩の舎と関わる「歌文」。これは、比較的長い分量で書かれ、歌会（和歌の優劣を競う会）のありさまや、近郊の散策をテーマとしている。

第二に、一葉が小説の執筆を志して師事した、半井桃水への思慕と苦悩をテーマとする「歌文」。

第三に、文学同人誌である『文学界』の青年たちとの交流から生まれた、人生観・人間観などをテーマとする「歌文」である。

これらの「歌文」は、一葉文学の生成と展開にも深く関わっている。とりわけ、樋口一葉における思想基盤としての『徒然草』の存在感を背後に感じさせる「歌文」に注目したい。さらには、現実感覚と虚無感の闘ぎ合いが明瞭に書かれている「歌文」もあり、一葉の思索家・思想家としての側面が浮かび上がってくる。

このように、「歌文」という記述スタイルに注目して分析すると、一葉文学の内的領域に新たな光を当て、一葉の心の深淵を明らかにできると思う。

なお、本稿で「一葉日記」と総称する日記類、および和歌詠草、小説など、樋口一葉の著作の引用は、『樋口一葉全集』（筑摩書房）によるが、それ以外の刊本も、適宜参照した。

## 一 「身のふる衣 まきのいち」における和歌と散文

「一葉日記」の第一冊は、草稿の散逸により、新世社版『樋口一葉全集』第四巻に掲載されている「身のふる衣 まきのいち」の本文が、『樋口一葉全集』（以下、『筑摩全集』「全集」と略称する場合がある）の第三巻上に再載されている。筑摩全集の当該日記に対する「補注」では、「この日記は、主として萩の舎の稽古歌会を記録したもので、不馴れな和文を用いて書かれており」とある。確かに、この日記に書かれている冒頭部の日付は、明治二十年一月十五日を始めとして、飛び飛びに、二十二日、二十九日、二月五日、十二日であり、これらは土曜日ごとの萩の舎の稽古日の日付である。

当日の客員歌人の名前や、和歌の高点を取ったことなどが、ごく簡単に書かれているだけで、一葉が詠んだ和歌は、日記に書き記されていない。

けれども、二月十九日からは、急に記述が詳細になる。発会を二日後に控えて、門弟の若い女性たちが交わす衣裳談義、それを傍らで聞く一葉、帰宅後の両親との会話などが、連続して書かれる。それに引き続いて、一気に、二月二十一日の発会当日の一葉の心境、門弟たちの豪華な衣裳と「わがふる衣」の対比、そして「月前柳」という題で六十余人の出席者が詠んだ歌の中で、自分の歌が高点であったというクライマックスへと、間断なく書き綴られている。

高点を取った和歌自体は、日記に記入していないが、「身のふる衣 まきのいち」は、発会で高点を取ったという、晴れがましい出来事を記念した日記であった。ちなみに、一葉が萩の舎に入門したのは、前年の明治十九年八月からであるので、わずか半年後のことである。

その後の日付は、二月二十六日、三月五日であり、どちらも萩の舎の稽古日である。二十六日は、「此の日、如何なりしか覚えず」というだけの記述であるし、五日は高点を取った歌を、歌人の鈴木重嶺に提出することになったという短い記事である。

ただし、その後に書かれている四月十六日の記事は、萩の舎の稽古日に急遽行われた、小石川の植物園への花見の散策のことが、詳しく書かれている。伝通院の中を抜けて近道をする場面は、次のように描写され、一葉の表現力の片鱗が感じられる。

篠竹・小笹など、間無く生ひ茂りて、道踏み分けむ方も無し。遙かに見渡せば、四方の山の端、靨黠として、霞棚引き、近き小山田には、里の髻髪（の、若菜摘むに、いとど飽く所、無けれど、（下略））

雲や霞が棚引くことを表す「靨黠」や、幼い子を表す「髻髪」などの古語を使っており、風雅な文体である。しかも、この日の日記には、萩の舎の人々が、植物園の桜の枝を思い思いに折り取ったのに対して、一葉は、日陰に生えていた楓の若木を抜いて自分の庭に移し植えて大きく育てようとしたことが書かれている。

桜の枝を折り取るという心ない行為は、『徒然草』第百三十七段でも、批判的に描写されていることである。若き日の一葉にも、兼好と共通する感受性が見られる。このことは、本稿で後述するような一葉の「歌文」に、『徒然草』と通底

する思想的側面が徐々に表れてくることの萌芽として、注目しておきたい。

「身のふる衣 まきのいち」は、この植物園散策記事の後は、翌週二十三日の稽古日の日記に、「落花道を埋む」という題が出て、坂本房子が詠んだ、「白雪の中を分け行く心地かな散りに散りたる山桜花」という和歌を書き記して、素晴らしい歌である、と述べている。

「身のふる衣 まきのいち」に書かれている和歌は、この一首のみであり、一葉は自作の和歌を一首も書いていない。日記の記事自体も、次は八月二十五日に飛び、歌合の会が行われたことが書かれているが、参加者の名前を挙げた途中で、終わっている。筑摩全集の底本となった新世社版の全集で、「右の方、人々ふそく……（以下歎）」となっているからである。

このように最初の日記である「身のふる衣 まきのいち」の時点では、一葉は、萩の舎の稽古日の記録として日記を書いており、それ以外の日常生活のことなどは書いていない。和歌も、他の門人の歌一首を、挙げていただけであった。

発会での最高点のことと、植物園散策のことと、萩の舎に入門したからこそその体験であった。ただし、これらの箇所には、情景描写も、自己の心理の描写も、詳しく書かれているので、筑摩全集の補注にあった、「不馴れな和文を用いて」という評は当て嵌まらないのではないだろうか。

あるいは、このような捉え方は、新世社版の小島政二郎による脚注に、「この日記は、既刊の日記以前のものであることは疑ひない。文章も思想も未だ幼稚であることは、一見して誰にも領けるものがあると思ふ」とあることと、関連しているように感じられるのである。

## 二 「若葉かげ」における歌文と散策記

「若葉かげ」は、「一葉日記」の二番目の日記帖である。明治二十四年四月十一日から六月二十四日まで、二ヶ月余りのことが書かれている。

最初の日記「身のふる衣 まきのいち」以来、四年近くが経過し、この間一葉の身辺には大きな変化があった。長兄泉太郎の死（明治二十年十二月二十七日）、父則義の死（明治二十二年七月十二日）、その後には、旧知の渋谷三郎との縁談話の消滅、明治二十三年五月からは、それまで一葉と母と妹の三人が同居していた次兄虎之助の家を離れて、一葉は萩の舎の内弟子となり中島歌子の家に住み込むなど、慌ただしい日々だった。

その内弟子生活も切り上げて、本郷菊坂町に母娘三人で水入らずの暮らしを始

めたのが、明治二十三年の九月末のことだった。

このような、人生の流転期とも言えるような歲月の中では、日記を書くこともままならなかったであろうが、「若葉かげ」を書くきっかけは、小説の執筆によって生計を立てようとして、半井桃水に師事したことだった。

執筆の苦勞、家族や萩の舎の人々から誤解された桃水との交際。この二つのことが一葉の心の苦悩となり、それを吐露する場として、日記の存在が欠かせないものとなっていった。

「若葉かげ」の冒頭に掲げられた、序文のような、改まった書き出しの文章には、その末尾に一首の自作和歌が添えられ、ここに一葉の「歌文」の原型が誕生することとなった。

以下にその原文を引用し、序文に込められた内面の吐露と、一葉の心意気に触れてみたい。

花に憧れ、月に浮かぶ、折々の心、をかしまも、稀には有り。思ふ事、言はざらむは、腹膨るるてふ喻へも侍れば、己が心に、嬉しとも、悲しとも、思ひ余りたるを、洩らすになむ。然るは、元より、世の人に見すべき物ならねば、筆に花無く、文に艶無し。唯、其の折々を、自づからなるから、或は、強ちに、一人誉めして、今更に、面無きも有り。無下に、卑しうて、物笑ひなるも、多かり。名のみ事々しう、「若葉かげ」など言ふものから、行末繁れの祝ひ心には、侍らずかし。

卯の花の憂き世の中のうれたさに己れ若葉の陰にこそ住め

季節や自然の美しさを感じた時、人は自分の心に湧き上がってくる思いを書かずにはいられない。「思ふ事、言はざらむは、腹膨るるてふ喻へも侍れば」とか、「元より、世の人に見すべき物ならねば」などという表現は、明らかに、『徒然草』第十九段の「思しき事言はぬは、腹膨るる業なれば、（中略）人の見るべきにもあらず」という部分に拠って書かれている。

したがって、自分が書く表現には華やかさはなく、たとえ、書いたとしても世間の物笑いであろうから、若葉の陰という意味の日記の題名も、行く末が茂るようにとの意ではないのだと、一旦、身を屈める姿勢を示してはいても、それらは言葉の綾であり、この日記には、他ならぬ自分自身のおのづからなる心の真を書いてゆこうという決意が滲む。

その決意の後ろ盾となっているのが、『徒然草』第十九段の一節なのだから、

一葉は何を恥じることもないのである。

しかし、そのような序文の末尾に置いた和歌は、「卯の花」に「憂し」を響かせ、「すめ」には「住め」と「澄め」を掛詞にして、華やかに世間で活躍するよりも、若葉の陰に隠れて、ひっそりと暮らしたいという、隠遁志向的な生き方が示されている。「憂き世の中のおれたさ」とは、憂き世の辛さを恨めしく感じているという意味である。

序文の文章の「張り」と、それを静かに受け止める一首の和歌。その両者が相俟ったこの歌文が、新たな文学世界を開示している。日記「若葉かげ」の冒頭部を「一葉歌文」の最初の作品と認定するゆえんである。

ところで、この序文に続いて書き始められる「若葉かげ」の最初の日記は、四月十一日の記事である。

「隅田川花見の宴」を中心に、菊坂の家を、妹と一緒に出発してから、夕方、帰路に就くまでの一日の出来事とその情景を、華やかに書き綴り、その中に和歌も点綴する長大な記述となっている。この日の日記は、一般に「歌文」と呼称される従来の文学スタイル、つまり、和歌的な文章と、その中に和歌も何首か入っているスタイルである。

文学史を溯ると、仮名日記の最初の作品とされる紀貫之の『土佐日記』が、すでに散文と和歌がセットになった記述であり、日付を持つ日誌であった。『土佐日記』は、紀貫之が土佐の国司の任期を終えて、舟で上京する旅日記である。以後の紀行文学でも、『土佐日記』のように、日々の旅の情景を書き綴る文章と和歌の融合したスタイルが定型となった。

近世になって書かれた「歌文」を集めたものに、新日本古典文学大系の『近世歌文集』上・下（岩波書店）がある。上巻の冒頭は、烏丸光広（一五七九―一六三八）の『春の曙』である。この作品は、光広が京都から江戸に下向した時の紀行文であり、寛永十二年（一六三五）二月六日に京都を発って、同十九日に品川に着くまでの毎日、散文の中に和歌だけでなく漢詩や狂歌も交えて書き綴った作品である。このようなスタイルが、従来は「歌文」形式の典型として、認識されている。

これに対して、先ほど、散文の末尾に和歌一首を添えた「若葉かげ」の序文を「一葉歌文」のスタートとしたのは、たとえば松尾芭蕉の俳文や、それに強い影響を受けた横井也右の俳文、そしてそれらも有の俳文を『鶉衣』として出版刊行した大田南畝における狂文集『四方のあか』などを念頭に置いてみると、一葉歌文は、これらの系列、すなわち、俳文や狂文のように、あるテーマについて、短

くまとまった分量で文章を書く系列に位置する文芸ジャンルとして把握できるのではないかというのが、私見だからである。

なお、「若葉かげ」の冒頭の日記では、上野の桜を見て、「山桜今年も匂ふ花影まなかげに散りて帰らぬ君をこそ思へ」と即興で詠み、一葉姉妹は亡き父のことを偲んでいる。上野からは人力車で隅田川まで行き、白鬚神社、木母寺、長命寺、三囲神社などを見ている。長命寺では母への土産に桜餅を求めて妹に渡し、三囲神社と別れて、萩の舎の女弟子の家に行くと、すでに門弟の子女たちが集まっていた。この高殿で、打ち上げ花火を、上の句・下の句の連歌の付け合いで詠み合ったり、隅田川堤の桜を遠望したり、帝国大学の競艇を応援したり、風雅な団居まどいである。

妹との花見から萩の舎の雅宴へと場面が大きく転換するが、一葉はこの二つの世界の両方に属している。そして、この日の日記の叙述も、ごくささやかではあるが、日頃の住まいを離れて出掛ける点では、小さな紀行文の一種となっている。そのことを思えば、一葉は、そのような韻文を織り交ぜて散文を綴る従来型の歌文スタイルを、すでに我が物としていると言える。

けれども、本稿で「歌文」と呼称する一葉の作品群は、従来の型の歌文とは異なる、新たな歌文である。したがって、以下の論述の中では、「従来型歌文」との区別のために、「一葉歌文」と呼称したい。「一葉歌文」とは、単に和歌的な文章で書き綴られたものではなく、またある程度の分量を持つ散文の所々に和歌が挿入されている作品でもない。まさに、芭蕉・也右・南畝たちの小品スタイルである、俳句や狂歌が文末に一句、または一首置かれて、散文と韻文が響き合い、拮抗するという文芸スタイルの近代における新たな成果として、「一葉歌文」を日本文学史の中に位置づけたいと思う。

### 三 「一葉歌文」の独自性

以上、文学史における紀行文・俳文・狂文の系譜の一つの新たな支脈として、一葉が書いた「散文+和歌」を、「一葉歌文」と総称することの意味と意義を述べた。

次に、「一葉歌文」の具体例を挙げながら、その特徴や独自性などについて考察したい。

まず、「一葉歌文」がどのような所に見出されるか、分類してみた。というのは、「散文+和歌」がひとまとまりになっているものは、一葉全集のあちこちに

散在しており、一箇所にまとまって出てくるわけではないからである。ということとは、一葉自身は、このようなスタイルの歌文を、明確に認識していなかった可能性もあるのであるが、たとえ本人自身が無意識であっても、特徴的な表現スタイルが認められる場合、そのことに注目すると、その文学世界の一端に光を当てることができるのではないかと思う。

その結果、次のような三つの分類になった。

- (A) 詠草の詞書  
 (B) 日記の記述の中に見られる「歌文」  
 (C) 日付のない断章の中に見られる「歌文」

また、歌文の表現や内容により、軽妙洒脱なもの(★)と、内省的なもの(★)の二種に大別できるので、それらに「★」と「★」の記号を付した。

詠草・日記・断章という内容分類は、筑摩全集の各巻の分類に概ね倣っているが、本稿で「断章」というのは、全集の第三巻下において、「日記Ⅱ」として収載されている「雑記」「感想・聞書」のことである。これらは、日付を持たない文章であり、日記とも言いがたく、かと言って短く断片的な面もあるが、深い内容を持つものも多い。したがって、本稿では「雑記」「感想・聞書」という二分した呼称は踏襲せず、まとめて「断章」とした。

また、「散文+和歌」を一葉全集から抽出して考察する場合、これらの歌文が思想的・内省的なものを多く含むことに鑑みて、全集各巻の枠組をはずして考えた方が、一葉の思想形成の一端を垣間見られると思う。

ただし、執筆年代が明記されていない場合もあるので、必ずしも時系列に沿った順に取り上げることはできないが、一葉の内面がよく表れていると思われる主な「歌文」を取り上げてゆきたい。

その際に、「題」を持つ「一葉歌文」はないのだが、本稿では仮に、字眼とつながっている語句を、歌文の題として付けてみた。また、紙面の都合により、歌文の中の散文部分の全文を示さず、多少省略した場合もある。

①「小萩」(B)★

廿七日 昨夜、雨や降りにつむ。朝、庭、少し湿りたり。七時頃、地震す。亡兄命日なればとて、畑つ物、煮などして、奉る。鳥尾君へ参らむ時の料にて、洗張させし衣、縫ふ。接ぎ物、昼前かかる。下前の襟、五つ、接

ぐ。袖に、接ぎ、二つ有り。

宮城野にあらぬものから唐衣なども小萩の繁きなるらむ

絶えず、かかと、打ち笑ふも、をかし。日、暮れて後は、手習ひをす。今宵は、筆の運び、いと思ふ様にて、例刻よりは、少し多く、なしたり。一時、床に入る。

これは、明治二十四年十月二十七日の日記の全文である。「一葉日記」においては、日記の記述の中に和歌が交じることはめったにない。その点が、まず注目される。しかも、ここで詠まれた和歌は、まるで『古今和歌集』における「誹諧歌」のような諧謔味がある。

日記の記述自体は簡潔であるが、この日一日の出来事が、手に取るようによくわかる。朝の庭の様子から昨夜の雨に触れ、朝方の地震のこと、二十七日は亡兄泉太郎の月命日であるので野菜を煮た精進料理を仏前に供えたこと、萩の舎の門弟の鳥尾広子郎で行われる歌合に着て行くための着物を洗い張りして縫うのだが、昼前までかかって、襟や袖を何枚も繋ぎ合わせて、何とか一着に仕立てたのだ<sup>10</sup>。

広子の父・鳥尾小彌太は、陸軍中将で貴族院議員。一葉は、この継ぎ接ぎだらけの着物を着て、鳥尾家に出掛けてゆくのである。窮迫した苦しい生活ではあったが、この継ぎ接ぎだらけの着物の出来映えは、悪くはない。そのことを、「小萩の名所の宮城野でもないのに、どうしてこの着物には『小萩』ならぬ『小さな継ぎ接ぎ』がたくさんあるのかしら」と、即興の和歌に詠んで、大笑いして打ち興じている。一葉日記の原文には「木萩」とある。「木萩」は『古今和歌集』の中世の古注釈書に見られる言葉である。

生活に追われながらも、夜になれば習字の稽古をする。筆運びも今夜は思うように運び、いつもより少し多く書いた。床に就いたのは午前一時になっていた。

本稿では、散文の末尾に和歌が一首付いて完結するスタイルを「歌文」の典型としている。よって、「小萩」は、あくまでも日記の一日分の記述の中に、和歌が一首入っており、和歌は末尾に置かれているわけではない。ただし、日記の文章のリズミカルな諧調と言い、和歌の諧謔性と言い、このような内容とスタイルの歌文が、この後、一葉の文学世界に表れてくるので、この日の日記を一葉歌文の一編に認定したい。

## ② 「雪仏」(A) \*

今年三月、花開きて、取る筆、いよいよ忙し。哀れ、此の事、終はり、彼の事、果てなば、一日、静かに花見むと願へども、嵐は情の有る物ならず。一夜の雨にも、木の下の雪、覚束無し。熟々思うて、雪仏の堂塔を営むに似たり。

風吹かば今も散るべき身を知らで花よ暫しと物急ぎする<sup>(1)</sup>

これは、筑摩全集の詠草に収められた、長い詞書を持つ和歌である。補注によれば、「明治二十八年二月から五月頃までの宿題系の詠草」という。

この詞書にある「雪仏の堂塔を営むに似たり」という短い一句は、『徒然草』第六十六段の冒頭部、「人間の営み合へる業を見るに、春の日に雪仏を作りて、その為に金銀・珠玉の飾りを営み、堂を建てむとするに似たり」という一文を、ぎゅつと圧縮して、格言のようにまとめたものである。一葉のすぐれた表現力が発揮されている。

また、「此の事、終はり、彼の事、果てなば」の部分も、『徒然草』第五十九段の「暫し、この事果てて」、「同じくは、かの事、沙汰し置きて」などといった言葉の痕跡を感じさせる。

段を隔ててはいるが、どちらも『徒然草』の中から言葉を拾って接ぎ合わせ、不自然さを感じさせない言葉の流露を見せている。そのうえで、止めがたい時の流れに抗して、齷齪する人間の愚かさを、我が事として一首の歌にまとめ上げた。

『一葉歌集』の編者である佐佐木信綱は、その冒頭の「一葉歌集のはじめに」で、「雑の歌の中、殊に詞書ある歌の中に、此種の秀逸の比較的多く見ゆるも注意すべきことなり」と述べて、一葉和歌における詞書のある歌に注意を喚起している。

ただし、今挙げているこのひとまとまりは、長い詞書を持つ和歌というよりも、明確な人間洞察を示して普遍性を持ち、「歌文」として自立している。つまり、この文章は詠歌の説明や解説である詞書を超えて、一葉の人生観・人間観を凝縮した批評文であり、和歌と一体となって自立性を持つ歌文であると言える。

## ③ 「遠き雲居」(A) \*

人も、寂しさの遣る方無ければとて、任所に近き野山の名所など、暇有る

毎に、見巡るめり。一日、逢坂山より、として、汽車待つ間の遊びに、文、遣しぬ。内に、蟬丸の社の物寂びたるも床し、など書かれたるを見れば、然様ならむ椽の端などに、仮初の旅姿、軽やかにしなして、草鞋など、仔細らしく履き締めつつ、尻打ち掛けて、矢立の筆、走らしけむ様、面影に浮かびて、をかしくも、今も見てしかと、漫ろに懐しうさへ成りぬ。

余所に聞く逢坂山ぞ恨めしき我は雲居の遠き隔てを<sup>(13)</sup>

これも詠草に書かれているものであるが、詞書が詳しく書かれていること、及び、その文章と和歌が一体化して「歌文」と呼ぶにふさわしいものとして、ここに取り上げた。

「人も」とあるのは、彦根中学に赴任した馬場孤蝶のことである。その孤蝶が、明治二十八年九月二十三日の天津への小旅行の際に、旅先から一葉に出した葉書に触発された歌文である。

一葉が孤蝶の風貌や軽妙な仕草を想像し、そこから流露する人恋しさが、和歌となっている。一葉文学の抒情性がよく表れている歌文である。「今も見てしか」の部分は、『古今和歌集』の「あな恋し今も見てしか山賤の垣穂に咲ける大和撫子」という古歌を踏まえている。

## ④ 「闇の哀れ」(C) ★

英雄と言ひ、豪傑と言ふ。如何に、その名の、事々しきならむ。機運、一度熟せば、万里の城壁も、越ゆべし。静かに思ひ、徐に考へて、無欲の中に、人事を思ふ者、世に頭れずして、終はる事、少しとせず。天地、永久に有りと雖も、一度、此の土を去りし者、二度、現世に頭るる事を聞かず。空しく思ひを抱きて、九泉に赴きし者、古来、幾許か有らむ。他界に対する観念と言ふ物、抑も、此の土に、何の功有らむや。哲と言ひ、仏と言ふ。元、此の土の人の為なるのみ。善偽・方便、何ぞ、悉く、探る事を用ゐむや。暫く、善きに随ひて、善きに進むべし。死しては、鳥と成り、獣と成る以上、知るべからず。自然の変化を、人力の左右し得べからず、と知れば、暫く、此の土に遊べる中の仕業として、善からむと思ふ人は、善けれ、悪しからむと思ふ人は、悪しかれ。神仏、何ぞ関せむ。唯、夫、心に恥づる所、無くんば、他界の諸仏、来りて、遊ばむ事、疑ふべからず。更くる夜の闇の燈火光消えば闇なるものを哀れ世の中<sup>(14)</sup>

これは、明治二十七年から二十八年にかけて書かれた、と推定されている断章である。次の断章と並んで、「一葉歌文」の双璧とも言える、すぐれた内容である。

一葉の歌文は、軽妙な書き方のものや抒情性に満ちたものもあり、それぞれに魅力的で、読み応えのある小品である。けれども、人生観や世間観が直截に吐露されて、深淵の縁に佇むごとき歌文となっているものがある。本作と次作がその代表であろう。

和歌に先立って置かれている文章は、もはや詞書の域を大きく超えて、人間の生と死への深い省察が書かれる。天地は永久であるが、人間は一度死ぬれば、二度とこの世に戻っては来られない。したがって、「他界に対する観念と言ふ物」も、いったいどれほどの効用があるのか、と述べている。一葉は、「心に恥づる所」がなければそれでよい、「神仏、何ぞ聞せむ」とまで書いている。

末尾に添えられている和歌の意を汲んで、敷衍してその内容を訳してみれば、「夜も更けてきたこの部屋で、燈火が消えれば、世界は暗闇となる。命の燈火が消えれば、それが死というものだ。まことにこの世は儂いものである」となる。ここには、一葉の虚無的とさえ言えるような、思索の果てが開陳されている。すぐれた批評精神の発露が、印象的である。

### ⑤ 「古松の鳥」 (C) ★

軒端の山に、古松有り。友無し鳥、一羽、止まりて、霜夜の月に、羽撃きして、鳴く声は、木枯に交じりて、恨める如く、恋ふるに似たり。我が八重葎の冬枯れて、垣根の葛の、うら寂しきに、小窓の破れ簾、掛かれるも、聞き過ぐしがたく、「やよ、山鳥。汝は、いづれの森にか育ちし。親は有りや。同胞は」と問へば、「ああ」といふ声、嘆じるに似たり。「人に夫妻有り。鳥獸、各々、連れ、無くもあらず。汝は、鰥夫か。夫妻鳥は、如何にしたる。早く、比翼の翼をもがれて、枯木宿らむとして、選むに、枝無き、一人住みの身か。然らずは、一人、思ひ上がりがりて、夫妻無し鳥、今更の冬枯に、餌食も辛き身の成れる果てか。然らずは、人欲・獸欲、あらゆる欲を眼下に見下ろして、高く、世を嘲笑ふか。我に、公治長の智、無しとも、思ふ事有らば、聞き知らぬにしもあらず。語れ、語れ」と、責めて言へば、「ああ」の一声、長く引きて、苦悶、二度鳴くに、勢ひ無く、空間高く飛び去る事、遠し。松の木枯、折しも吹き荒れて、大空に雲の飛ぶ事、繁し。諸共になど伴はぬ山鳥憂き世の秋は同じかる身を

これも、前作と同時期と推測される断章である。文章も、ほぼ同様の長さであり、思索もまた深い。

ただし、前作が、論理的な批評文学的な歌文であったのに対して、これは、まるで戯曲を読むような歌文である。いったい、このような情景を、一葉が実際に体験したのだろうか。あるいは、すべて一葉の内面のドラマなのだろうか。文章の流れに沿って、内容を辿ってみよう。

軒の向こうに見える岡に、一本の古い松の木が立っている。ただ一羽、鳥が、その梢に止まっている。寒い霜夜である。空には、月が皎々と照っている。鳥は、羽ばたいて鳴いている。その声は木枯らしに交じって、恨むが如く、恋うるが如く、聞こえてくる。わが家の庭は、八重葎が生い茂って、荒れている。垣根に絡まっている葛の葉が風に裏返って、裏を見せるのが恨みがましい。小窓に懸かった夏の簾も、今はもう、あちこち綻び、破れている。そんな荒涼とした荒屋のせい、鳥が鳴くのも、凄く聞こえ、鳥に問いかけずにはいられない。

「おお、鳥よ、お前はどこの森で育ったのか。親はいるのか、兄弟はどうだ」と問えば、「カア」という声は、悲歎の声のようにも聞こえるではないか。

「人間に連れ合いがあるように、鳥や獸であっても、連れ合いは、いようものがれて、たった一人で枯れ木に宿ろうにも、止まり木になる枝もないというのか。お前は、独り栖みなのか。あるいは、そんな悲しい境遇に追いやられたのではなく、我と我が身を思ひ上がって、妻無し鳥の身で冬枯れのこの季節、餌を漁るのも辛い身のなれの果てなのか。そうでなければ、あらゆる欲望を眼下に見おろして、樹上に高く止まって、世間のすべてを嘲笑うのか。わたしは、あの『論語』に出てくる、鳥の言葉をわかったというような賢者ではないが、よしやお前が、心に思うことがあるならば聞かせてもらおうではないか。さあどうだ、鳥よ。語れ、語り尽くせよ。」

その時、鳥はただ一声、「鴉鴉」と長鳴きしただけで、もはや、再び苦悶の声を挙げる力なく、虚空を高く飛び去った。ちよと、その時だ、囁々と吹き荒れる木枯らしが松風を鳴らし、鳥が遠く飛び去った空を見遣れば、雲が飛ぶように流れてゆく……。

鴉よ。お前は遠く行ってしまった。なぜもつとわたしと語り合わないのだ。今はもう、秋も深まった。

この辛い憂き世の秋に、飽き飽きしているのは、お前もわたしも同じでは

ないか。

エドガー・アラン・ポーの詩「大鴉」を思わせるような、暗鬱で、蕭条とした光景が広がる。神韻縹渺たる世界を、一葉は構築している。鳥への矢継ぎ早な問いかけは、一葉自身の人生観、死生観への性急な検閲であり、ここに、一葉は、我が身の虚無と向き合った。一葉は、萩の舎の親しい友人である伊東夏子に宛てた、明治二十七年三月頃と推定されている手紙の中に、「君は宗教の門に入り、我は虚無の空理に酔ふ」とある。一葉は、この⑤の歌文によって、みずからの思想を描き切った。「一葉歌文」の極北とも言える到達境であろう。

⑥ 「拗ね者」(C)★

愚かや。我を、拗ね者と言ふ。明治の清少と言ひ、女西鶴と言ひ、祇園の百合が面影を慕ふと叫び、小万茶屋が昔を歌ふも、有めり。何事ぞや。身は、小官吏の乙娘に生まれて、手芸、伝はらず、文学に縁遠く、僅かに、萩の舎が流れの末を汲めりとも、日々夜々の、引窓の煙、心に掛かりて、いかで、『古今』の清く、高く、『新古今』の、彩に、珍しき姿・形を、思ひ浮かべ得られむ。増してや、鳩の海の底深き式部が学芸、思ひ遣るままに、境遙かなり。唯、些か、六つ、七つの幼立より、誰伝ゆるとも覚えず、心にうつりたる物の、折々に形を顕して、斯く、はかなき文字沙汰には成りつ。人、見なば、拗ね者など、異様の名をや得たりけむ。人は、我を、恋に破れたる身と思ふ。哀れ、然る、優しき心の人々に、涙を注ぐ我ぞかし。この微かなる身を献げて、誠を顕さむと思ふ人も無し。然らば、我一代を、何がための犠牲など、事々しく問ふ人も有らむ。花は散る時、有り。月は、隠る時、有り。我が如き者、我が如くして、過ぎぬべき一生なるに、はかなき拗ね者の呼び名、をかしうて、  
空蟬の世に拗ね者と言ふなるは夫子持たぬを言ふにや有るらむ  
をかしの人言よな。

これは、明治二十八年三月から四月にかけて書かれたと推定されている断章である。これまでに紹介した一葉の歌文の中で、最も長い作品である。

この歌文は、今回、すでに取り上げた歌文の世界、そして一葉文学の基盤形成となつている『徒然草』との関連性など、さまざまなもの重層的に込められている。よって、最後に取り上げて、本稿のまとめとしたい。

冒頭が「愚かや。我を、拗ね物と言ふ」と書き出されているのは、この歌文が書かれた少し前の時期に、馬場孤蝶からの手紙(明治二十八年三月十五日付)が届き、そこに「世を拗ね者の、二葉の春を捨てて、秋の一葉と嘯き給ふ事、訳は侍るべし。柳の糸の、結ばれ解けぬ片恋や、発心の基」、などとあったからである。孤蝶は、一葉の生き方や態度の原因を憶測しているのである。

馬場孤蝶は『文学界』の同人で、本郷丸山福山町の樋口家にもたびたび訪れて、文学談義を交わす親しい友人である。そこから、遠慮のない、洒落た言い方になつているが、孤蝶なりに、一葉の生き方を危ぶんでいるような心情も窺える手紙である。

それに対して一葉は、自分は世間で言い難されるような人間ではない。『古今和歌集』・『新古今和歌集』のような、本格的な勅撰和歌集の世界にも疎く、ましてや『源氏物語』を書いた紫式部の学識に遙かに及ぶべくもないと、謙遜する。けれども、それに続けて、「心にうつりたる物の、折々に形を顕して、斯く、はかなき文字沙汰には成りつ」という部分には、『徒然草』序段の、「心にうつりゆく由無し事を、そこはかとなき書き付くれば」という言葉が遠く響き、さらに、「人、見なば、拗ね者など、異様の名をや得たりけむ」と続く部分にも、『徒然草』第四十段の、「異様な者」という言葉の痕跡が見出せる。一葉の文学形成に『徒然草』が果たした役割は、ことのほか大きい。

この文章の末尾部分も、④で取り上げた歌文とも通底する。自分の生き方は自分が納得する形で行えばよく、それを他人が「拗ね者」と呼ぶのは笑止だ、と言うのである。世間の人々は、結婚して子どもを持つ生き方だけを指針として、それ以外の生き方をする人間を理解できないのであろう、と批判している。ここには、⑤の歌文に書かれていた「烏問答」のテーマも響いていよう。

一葉における思索の結実は、「歌文」という凝縮したスタイルの中に見出される。そこでは、散文と和歌が交響し、思索は、思いもよらぬほど深く沈潜してゆく。そのような新しい文学の領域として、一葉が到達した「歌文」の世界を、本稿では垣間見ることができたように思う。

おわりに

本稿では、樋口一葉の日記に散見される和歌が、日記の文章と相俟って、ひとつのまとまりを持つ小品として、自立する場合があることを考察してきた。

「散文+和歌」を「歌文」と名付ける時、文学史の上ではすでに近世に生まれ

た、「俳文」や「狂文」と呼ばれる作品群に続く、近代の「歌文」として、新たな文学領域を見出すことができたのではなからうか。このような視点を立てて、「一葉歌文」の実例と見なされるものを挙げてみた。

この文学史的な試みは、いまだ端緒に付いたばかりである。今後は、一葉作品の中に、さらに「歌文」と名付けられる例を探索したい。それと同時に、他の近代文学者たちの作品に、「一葉歌文」と同様の「散文＋韻文」というスタイルの小品群を探してゆきたい。

このような研究は、日本文学における散文と韻文の関係性を考察する、新たな視点となるであろう。場合によっては、「短編小説＋韻文」と言うスタイルをも、視野に収めることができるのではないか。そのように考えれば、文学と絵画の響映にも、心が惹かれる。たとえば、俳画も、文学の側面から新たな光を当てられるのではないだろうか。

いずれにしても、これらの作品の規模は、不思議と、「小品」というイメージがある。小さな世界に豊かな文芸性や芸術性が込められている時、ささやかな中に深遠な人生観や人間観を見出すだけでなく、親密で軽妙な、人間味溢れる世界も、そこには広がっているだろう。今回の考察では、「一葉歌文」における軽妙洒脱な側面が表れている具体例は、「小萩」の歌文などわずかであった。ただし、「一葉」という筆名は、寄る辺なさや儂さだけでなく、その由来の一端となっているのは、達磨禪師の蘆の一葉舟の故事である。

そのことに触れた一葉の和歌を日記の中から挙げて小考し、本稿の締め括りとした。

次に挙げるのは、大田南畝の狂文集『四方のあか』の巻頭を飾る狂文である。

達磨賛  
拈華微笑の床花は、正法眼蔵の帯をとかせ、教下別伝の正伝節は、文字大  
夫が流を立てず。蘆の一葉の猪牙舟に乗りて、九年面壁の居続けとは、汝が  
尻の腐れ縁か。金がふんだんだるまなるか。からから喝。  
九年酒のつまり肴の座禅豆外に本来一物も無し。

文章スタイルの「賛」に、「達磨さん」の「さん」を掛けている題からして、軽妙である。ここに、「蘆の一葉の猪牙舟」とある。達磨さんは、蘆の一葉に乗って川を渡るという故事があり、画題でもある。「一葉日記」の明治二十六年四月十九日の記述は、知人の香典にも事欠く生活を、「我こそはだるま大師になり

にけれどぶらはむにも足なしにして」と詠んで、暗くながちな日常を、軽妙に乗り切ろうとしている。「足」は「銭」の掛詞である。

一葉は、言葉の力で、辛い憂き世を精一杯に生き抜いた文学者であった。

## 注

(1) 手元にある『校訂樋口一葉全集』(博文館、明治三十年一月九日発行)は、明治三十六年三月十五日十版である。この校訂版全集の冒頭に以下のように、簡略であるが意を尽くした略伝が掲載されている。ここでは行の区切りを/を入れた。全六行である。

「一葉女史、樋口夏子君は東京の人なり。明治五年/三月二十五日を以て生る。歌を善くし、文を善くし、/兼て書を善くす。始めて筆を小説に下したる/は、明治二十五年二月なり。こゝに小品と、もに、集/むるもの二十四篇、別に通俗書簡文の著あり。明治/二十九年十一月二十三日、病を得て歿す、歳二十五。」

(2) 『樋口一葉全集』(塩田良平・和田芳恵・樋口悦編纂、全四巻、筑摩書房。昭和四十九年三月/平成六年六月。第一巻(小説上)、第二巻(小説下・未完成資料)、第三巻上(日記I)、第三巻下(日記II・随筆)、第四巻上(和歌I・II)、第四巻下(和歌III・書簡・和歌索引)。第三巻と第四巻がそれぞれ上下からなるので、全六冊である。その他に参照した主な刊本は以下の通りである。

・『樋口一葉求簡集』(野口碩編、筑摩書房、一九九八年)  
・新世社版『樋口一葉全集』(監修幸田露伴、全五巻、昭和十六年/十七年。第一巻(責任編纂佐藤春夫、小説I)、第二巻(責任編纂久保田万太郎、小説II)、第三巻(責任編纂平田禎木、日記I)、第四巻(責任編纂小島政二郎、日記II)、第五巻(責任編纂萩原朔太郎、書簡文範、随筆、和歌)、別巻『樋口一葉研究』(和田芳恵責任編纂、新世社、昭和十七年)

・小学館版『全集 樋口一葉』全四巻(前田愛編、小学館、昭和五十四年。第一巻・小説編一、第二巻・小説編二、第三巻・日記編、第四巻・評伝編)

(3) 新世社版『樋口一葉全集』では、日記は、第三巻(昭和十六年九月刊)と第四巻(昭和十六年十二月刊)に、分冊されて掲載されている。第三巻には、「若葉かけ」(明治二十四年四月/六月)から「につ記」(明治二十六年七月)まで。第四巻には「塵の中」(明治二十六年七月)から「みづの上日記」(明治二十九年七月)までが、まず最初に位置し、その後に「日記・未発表断片」および「書簡」が収められている。その後に「身ふる衣 まきのいち」は、「日記・未発表断片」の冒頭に置かれている。ちなみに、「書簡」とあるのは、一葉が出した書簡が、通し番号で一から八まで掲載されている。

(4) 『樋口一葉全集』第三巻(上) 八頁。

(5) 注4書、六頁

(6) この点については、拙稿「樋口一葉と徒然草―初期の日記と習作を中心に」(放送

大学研究年報」第九号、平成三年三月）で触れた。

(7) 新世社版全集第四巻の、小島政二郎による「後記」の冒頭に、「ああ、やつと註が出来上がった」とある。なお、ここで「既刊の日記」とあるのは、馬場孤蝶編集・校訂『一葉全集』前編（博文館、明治四十五年）を嚆矢として、一葉日記が収められるようになったことを指す。ただし、「身のふる衣 まきのいち」が収められたのは、新世社版からであった。

(8) 注4書、「若葉かげ」、一六頁。

(9) 『樋口一葉全集』第三巻（上）、『蓬生日記 一、六八〜六九頁』。

(10) 新世社版全集第二巻付録の「一葉ふね」第一号に、木村莊八が「装幀について」というエッセイを寄稿している。その文中に、一葉の小袖のことが「面白なのは胴に左右ほんの少しづつ、四角な色変りのはぎがあることで、くすんだ水色ちりめんの、蛇かごや杭などをぬき出した文様になつてゐます」、「背ぬひにかけて細く浅黄色に飛梅を白くぬいた文様の小切れが二寸幅ほどに襟元から腰まではぎ合はせてありますが、これも全体の色どりから見ても極く配置の良い、好趣味です」などと、書かれていますが、日記に出てくる「小菽」のことではないが、継ぎ接ぎした着物の端切れの色合いや全体の色取りのことが具体的に書かれているので、興味深い。

(11) 『樋口一葉全集』第四巻（上）、詠草44、三三〇頁。

(12) 樋口夏子著『二葉歌集』（博文館、大正元年）の「一葉歌集のはじめに」の末尾に、

「大正元年十一月 佐佐木信綱識」とあり、冒頭文にも「さいつ頃、幸田露伴君、訪ひ来られて、故一葉女史の妹邦子ぬし、姉の十七回忌の記念に、故人の和歌をえらびて一卷となし、人々に頒ち、世にも公にせむの企あるにつきて、その選を予に囑せられぬ」とある。佐佐木信綱は、「歌数すべて三千七百六十四首」の中から、「つとめて女史が作風を残さむことを、むねとし」て、新年の歌、春の歌、夏の歌、秋の歌、冬の歌、恋の歌、雑の歌に部立して配列した。「年代順に、せまほしかりしかど、詠草の年月さだかならざるもの多かりければ、しかせず」と、書いている。

(13) 注11書、詠草46、三三七頁。この詞書には、「汽車待つ間の遊びに、文、遣しぬ」とあり、『樋口一葉来簡集』（野口碩編、筑摩書房、一九九八年）に収められている、明治二十八年十月十一日付（封書資料）の馬場孤蝶の手紙の中でも言及されているが、この時に出した孤蝶の葉書自体は残っていない。

(14) 『樋口一葉全集』第三巻（下）、感想・聞書8、七五一頁。

(15) 注14書、七五二〜七五三頁。

(16) 注14書、感想・聞書11、七七六頁。

(17) 新日本古典文学大系『寝惚先生文集 狂歌才藏集 四方のあか』（岩波書店、一九九三年）

（二〇一八年十月三十一日受理）

## Waka and Prose in *Ichiyo-Nikki*

Yuko SHIMAUCHI

### ABSTRACT

This dissertation pays attention to the wakas scattered in the diary of Higuchi Ichiyo (樋口一葉, 1872~96). In her diary Ichiyo shows a particular form of writing which adds a waka (和歌) in the end of each prose. The present writer tries to illustrate the author's intention in using this form, comparing it with similar examples found in the Japanese classical literature.

Higuchi Ichiyo is generally known as the author of stories such as *Take-Kurabe* (たけくらべ), *Nigorie* (にごりえ), *Otsugomori* (大つごもり), *The Thirteenth Night* (十三夜) etc.. But the brief biography put at the head of *The Revised Edition of the Complete Works of Higuchi Ichiyo* (『樋口一葉全集』), which was published a month after the author's decease, says, 'she was excellent in waka, in prose and in calligraphy.' The editor seems to think that waka was the most important portion of Ichiyo's literally work.

Ichiyo started her literally career by entering Haginoya (萩の舎) in 1886, when she was fourteen years old. Haginoya was Nakajima Utako (中島歌子)'s Kajuku (歌塾, a private school where, besides waka, classical literature and calligraphy were taught).

*Ichiyo-Nikki* (一葉日記, the diary of Higuchi Ichiyo) was started in 1886 and continued until two months before her death, although some part of it is now missing. Some entries in it have wakas attached in the end of prose.

In Japanese literature before Ichiyo, we find some literary forms which fuse prose and verse. For example, Haibun (俳文) by Matsuo Basho (松尾芭蕉) and Yokoi Yayu (横井也有) attaches a Haiku to a prose, while Kyobun (狂文) such as *Yomo-no-aka* (四方のあか) by Ota Nampo (大田南畝) attaches a Kyoka (狂歌) to a prose. In *Ichiyo Nikki* we find a form which attaches a waka to a prose. The present writer suggests to call this form 'Kabun' (歌文).

This dissertation aims at classifying Ichiyo's Kabuns according to their thematic characteristics. Ichiyo's Kabuns can be divided into three major groups, each of which has its own particular themes.

The first group is related to Haginoya. Its themes are Kakai (歌会, a contest of waka) and excursions in suburbs.

The second group is related to her longing for Nakarai Tosui (半井桃水) which brought her some anguish of heart. Nakarai Tosui was Ichiyo's teacher under whom she studied writing stories.

The third group was born from her intercourse with the young men of Bungakukai (文学界). Its themes are her views on life and people etc..

These Kabuns are closely related to the formation and development of Ichiyo's literature. Particularly, the present writer intends to focus upon those Kabuns which make one feel *Tsurezuregusa's* (徒然草) presence as the basis of Ichiyo's thinking. There are some Kabuns, too, which vividly express the conflict between her sense of reality and her sense of nothingness, thus revealing a clear profile of Ichiyo as a thinker.